

## 「罪人を招くために」 (マタイ九・九〜一二)

### 1 招き

今日の聖書にあるのは、一つはマタイという人がイエス・キリストの弟子になったということ、もう一つは、このマタイと同じ職業の徴税人たち、また罪人たちとイエスが食事をともにされたということです。

マタイとはこの福音書を書いたマタイです。彼はレビという名前ももっていて、他の福音書、マルコによる福音書とルカによる福音書は、レビという名の人のこととして、同じ出来事を伝えていきます。

レビがもともとの名前だろうと思いますが、レビにせよ、マタイにせよ、ここに記されているのは自分のことであって、したがってこれは彼の証しであり、その信仰の告白でもあるといってもよいのです。ただ注意したいのは、ここには自分の回心体験のようなものは書かれていない、自分がここでの主人公ではない。証しされているのは、彼において働いてくださった方、イエスであり、そのお言葉です。この方はだれか、どのような方かということです。この方、イエスに、私ども目を留めなければなりません。

イエスはそのをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った(九節)。

これ以上ない簡潔さで記された弟子への招きの記事、マタイがイエス・キリストの弟子とされたという出来事です。

ただ私どもがまず目をとめるべきは申し上げたようにイエスです。じつさい「イエスは」と(イエスを主語として)この箇所は始まっています。イエスがマタイを見てわたしに従いなさいと命じられます。マタイがイエスを見て、先生としてふさわしいと考え、従うことを決めたわけではありません。

またここには、「通りがかりに」とか「見かけて」などの言葉があり、イエスとマタイの出会いが偶然であったかのように書いてあります。しかしそう見えるだけで決してそうではありません。ヨハネによる福音書に、十字架を前に、弟子たちと別れようとするときのイエスの言葉が伝えられています。「あなたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだのである。そしてあなたがたを立てた」(一五・一六、口語訳)。「わたしがあなたがたを選んだ」。マタイもみころにしたがつて、召され、従う者とされます。選んで、この人をと見込んで、召してください。たまたまそうなったわけではありません。神の永遠の決意において始まったことです。彼はイエスのまなざしにとらえられます。呼びかけられ、そして召されます。こうしてイエスに従う生活が始まります。イエスとともに歩む生活、今までとは違う生活へと導かれていくのです。

## 2 徴税人マタイ

マタイはどういう人であったのでしょうか。これを知れば招きが全く特別のことであつたことが分かります。彼の職業は徴税人でした。当時のユダヤの社会で徴税人であるということが何を意味していたか、彼らと食事をしてきたイエスをとがめたファリサイ派の人たちの言葉に明らかです。

「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」（一一節）。

徴税人と罪人とが同じく扱われています。罪人とは、悪霊につかれた者や占いをする者、あるいは姦淫の女（ヨハネ八章）など、律法と呼ばれる掟を守らない、守ることのできない人びとのことです。福音書に出てきます。彼らは律法遵守を至上命令とするユダヤ教ファリサイ派によつて、罪人として、宗教的にも社会的にも疎外されていました。徴税人も罪人と同じように見られたのです。徴税人というのは宗主国であるローマ政府に税を収めるユダヤの徴税請負人の下で、じつさいに税を集める、取り立てる現場の仕事をしてきた人です。ザアカイという名の金持ちの徴税人のことがやはり聖書に出てきますが、彼のように嫌われていた、彼らはさげすまれていたといつてよいでしょう（ルカ一九章）。ローマとその傀儡のヘロデ王に支配される中、その権力をバックに、ほとんどが不正に蓄財し、当時の掟では、汚れた物や動物などと同じく会堂に入ることも禁じられていたようです。

このような人の一人マタイをイエスは弟子として招いたのでした。マタイは二〇代の青年です。「収税所に座っているのを見かけて」とあります。「座っている」という表現は、招かれて「立ち上がった」ことと対照的です。ルカでは「何もかも捨てて立ち上がり」とあります。「座っている」という言葉は、現状に満足するしかない、あまり明るい展望をもつことができないでいた青年マタイの気持ちを表しているような言葉です。その彼に、わたしに従え、という力強い言葉が発せられます。彼は立ち上がります。イエスのもとに呼び寄せられます。神の国の宣教のためにイエスと一緒に歩む仲間として招かれます。

こうしてマタイがイエスとともに、イエスの弟子として歩み始めてまもなくのことでした。次のようなことがあつた。

イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やつて来て、イエスや弟子たちと同席していた（一〇節）。

「イエスがその家で」とあります。「イエスが家で」という訳もあります（聖書協会共同訳他）。その場合はイエスが自分の家で食事をしてきたときということになります。しかしこのように「その家で」となると、前後関係からしてマタイの家です。他の福音書マルコ、ルカでも、マタイの家となっています。

マタイの家だとすると、マタイはイエスに家に来てもらい、彼の徴税人仲間も呼ん

で、お別れの会のようなものを開いていたと考えることができます。ですから徴税人がたくさん来ていたのです。そこには罪人といわれる人も、もしマタイが呼んだのでなければ、来たのです。しかも一人二人ではない、大勢そこにやって来ていたのでした。重要なことは、そのようにしてイエスが徴税人や罪人と同じ食卓に着いていたということなのです。こういうことは一回だけでなかった、例外的なことでもなかった、イエスというと、あああの、ああいう連中と食事をしてるやつということになっていたのです。笑い声がひびき、大声が飛び交い、カナの婚禮のときのようにぶどう酒も入って、座は楽しく盛り上がっていたと思います。イエスは、「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」（一一・一九）と悪口、陰口がたたかれていたともあります。

それでも見過ごしてならない重要なことは、その食卓の中心にイエスがおられたということなのです。イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としない（ヘブライ二・一一）。そうしてイエスは神が彼らを受け入れて下さっていることを身をもって示された。教えるイエス、いやしをなさるイエス、神の国について説教なさるイエス、それだけではない、忘れてならないのは、このような食卓の主としてのイエスです。この方が神の国の宴の主です。

### 3 罪人を招く

このようなイエスをことのほか冷ややかにながめ、文句をつけた人たちがいたので、ファリサイ派と呼ばれる人びとでした。当時のユダヤ教の中で律法を厳格に守ることを絶対的なことと考えていた、祭司ではなく、信徒の集団です。彼らは民衆の信仰生活の指導者を任じていました。

ファリサイ派の人びとはこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである（一〜一三節）。

ファリサイ派の人びとは直接イエスではなく、弟子たちに質問とも批判とも、あるいは嘲笑ともとれるような言葉を投げかけます。弟子たちはこれをイエスに伝えたのでしよう。するとイエスは、ファリサイ派の人々に対して、きびしい調子で、これらの言葉を語ったのです。

これらのイエスの言葉から、有名な放蕩息子のたとえを思い起こすように指示している聖書解釈者（シュニーヴィント）がいます。ここに出てくるファリサイ人は「放蕩息子のたとえ」（ルカ一五章）では兄に当たるのでしょうか。兄は、弟が落ちぶれて帰ってきたことを聞かされても、好きなことをしてきたのだから、自業自得、むしろ

る罰を与えるのがふさわしいと考えています。しかし父である神は考えが違っています。父の考えでは、弟は、放蕩に身をもちくずし、自由の名のもとにまことに人間性を失った生活をせざるをえなかったということ自体において罰は受けてしまっている、したがっていま彼に必要なのは救いだと考えてたのです。徴税人も、なるほどたいてい不正を働いて私腹を肥やしています。金持ちです。でもそれによって彼ら自身が多量に傷ついていたことでしょうか。その仕事のために世間の冷たい視線にさらされ、かえっていつも心かたくなにせざるをえなかった。そのような者こそ救われなければならぬ、彼らこそ、いわば医者が必要とする病人なのだ、そのようにイエスは語っています。

先に申し上げたように、マタイはイエスの弟子となつて、今までの職業に別れを告げようとしています。この会食は別れに当たつての感謝の会の意味ももっていたかも知れませんが、救いの喜びをもたらしたイエスを仲間を紹介したい、それがマタイの心からの願いでもあつたかも知れません。この日は、彼にとって本当に忘れることのできない日となつたのです。何よりイエスが、この方こそ招く方であり、私たちは従う者であるのに、マタイの招きに応じて、家に来て、彼の仲間の者たち、取税人や罪人と食卓についてくださったということ、それは彼にとつて忘れることのできない出来事であつたのです。

それだけでなくこの日は忘れられない言葉も聞いたのです、「わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。罪人を招くため、その罪人とはまさしくこのわたしなのだ。招くとは、名を呼ぶ、呼び寄せるといふような意味です。このわたしを神のもとに呼んでくださるためにキリストは来られた、その日マタイの心深く刻まれたことでした。

マタイはのちに、彼の書いた一二弟子のリストの中に「徴税人のマタイ」と書き入れています(一〇・三)。徴税人であつた者が救われた、私は救われた罪人にすぎない、思い上がつてはならない。彼の変わらない謙遜な思いでした。神のあわれみがこの私にも注がれた、ただこのあわれみによつて今日も生きることを許されている、そしてそれを伝える者として人生のかぎりをささげたい、そのような初志を、自分の名に「徴税人」と冠して後世に書き残した。マタイとは神の賜物を意味します。レビという名を用いることを彼はしませんでした。たしかにいまある人生はただ神の贈り物なのですから。

今日の日曜日は受難節前第五主日です。イエス・キリストの十字架の苦難と死、その救いをおぼえるべき、教会暦では最初の主日になります。この日のため与えられたのが今日の箇所でした。「罪人を招くために」、わたしを招くために、そうです、十字架の死に至るご生涯のすべてが、わたしを含む「罪人を招くため」という一点にあつたことを改めておぼえて、二月、三月、そして四月、新しい年度へ歩みを進めていきたいと思ひます。

(二〇一九年二月三日)